

令和 7 年度病虫害発生予報第 3 号（7 月予報）

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
ナス	カスミカメ類	平年並	やや多い
	ニジュウヤホシテントウ	平年並	やや多い
ホウレンソウ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
ネギ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
野菜類・花き類共通 （ホウレンソウ）	アブラムシ類	平年並	多い
野菜類・花き類共通 （冬春トマト）	コナジラミ類	平年並	やや多い
野菜類・花き類共通 （冬春トマト、キク）	オオタバコガ	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の 1 ヶ月予報：6/28～7/27）

気温：高い確率が 80% 降水量：少ない確率が 50%

日照時間：多い確率が 60%

○今月の農薬適正使用のポイント

6 月 1 日～9 月 30 日は農薬危害防止運動の重点実施期間です。今年度の運動のテーマは「農薬は 周りに配慮 正しく使用」です。農薬のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、ドリフト対策の徹底、薬剤の適正な保管管理等、農薬適正使用について指導の徹底をお願いします。

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。以下のような作物間ではいずれも農薬登録内容が異なりますので、特に注意して下さい。

○トマトとミニトマト

○ピーマンとシシトウ

○実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○さやいんげん（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）といんげんまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○メロンと漬物用メロン、すいかと漬物用すいか

その他、判断に迷った場合には、各農林（農業）振興事務所または病虫害防除所へお尋ねください。

I. 普通作物

1. 水 稻

(1) いもち病（葉いもち病）

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率 0.9%でした。
- 2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 中山間地域において出穂前に葉いもちの初発を確認したら、直ちにブラシフロアブルで防除します。
- 2) 穂いもちの予防に粒剤を使用する場合、オリゼメート粒剤は出穂の3～4週間前までに、コラトップ粒剤5は出穂30日～5日前までに処理します。粉剤や水和剤を用いる場合は、出穂始めと穂ぞろい期の2回が防除適期です。1回防除の場合には出穂始めに防除します。
- 3) ほ場の周囲に収穫期の野菜等がある場合には、ドリフトを避けるため、粉剤や水和剤は使用せず、必ず粒剤で防除します。
- 4) 粒剤を施用する場合は、処理前に湛水し、処理後1週間は必ず止め水管理をします。

(2) 紋枯病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 昨年に本病の発生が多かったほ場では、初発時期が早くなる可能性があります。
- 3) 今後、気温が高く推移し適度な降雨があると、本病の病勢を進展させます。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は中山間地域では7月上旬～中旬、平坦地域では7月下旬～8月上旬です。常発ほ場では遅れないように防除を行います。また、中山間地域の発生ほ場では、8月中旬までに中位葉鞘への病斑の上位進展が認められれば、直ちに追加防除を行います。
- 2) 水和剤や粉剤で防除する場合には、株元に薬剤がよくかかるように、落水してから防除します。

(3) ばか苗病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) ほ場内をよく観察し、発病が認められた場合にはすみやかに株ごと抜き取り、焼却するか地中へ埋設して処分します。特に採種ほ周辺では、発病株の抜き取りを徹底します。
- 2) 発生ほ場では自家採種を控え、種子更新を行います。また、次年度の種子消毒を徹底します。

(4) ニカメイチュウ第1世代

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 株元を中心に寄生や被害がないかよく観察します。被害を確認した場合は、トレボン粒剤で防除します。

(5) トビイロウンカ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6/26日現在で、農業研究開発センター（桜井市池之内）内の予察灯へのトビイロウンカの飛来は認めていません。

- 2) 6月中下旬の巡回調査では、本田での発生を認めていません。
- 3) 3ヶ月予報では、7～9月の気温は平年より高いと予想されています。7～8月に高温に見舞われると、飛来が少なくても本田で急増して9～10月に坪枯れが発生する可能性があります。夏が高温になった場合は、病虫害防除所が発表する情報に注意してください。

防除上の注意事項

- 1) トリフルメゾピリム、オキサゾスルフィルまたはフルピリミンを含む箱粒剤を処理していない場合は、念のため7月上旬中旬にトレボン粒剤を処理します。

(6) 斑点米カメムシ類

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、中山間地域での発生は場率は13.3%でした。
- 2) 本田内での優占種はアカスジカスミカメでした。

防除上の注意事項

- 1) 水田周辺のイネ科雑草に対し、水稻出穂の20日前と出穂直前の2回除草しておくとかメムシの侵入が減少します。ただし、出穂直前の1回除草のみでは逆にカメムシが増加する場合があります。20日前の1回除草の場合は、出穂期の薬剤防除を併用します。また出穂期のみの1回除草はカメムシを水田に追い込むこととなりますので控えます。
- 2) カメムシ被害は水田の畦畔沿い（外から1m幅、通称・額縁部）で多くなります。そのため、この部分の防除は高い効果が得られます。
- 3) 周辺で養蜂が行われている地域では、農薬の使用に際し、事前に関係者への情報提供を行う等十分な危害防止策を講じます。
- 4) 休耕田や管理不十分な雑草地など、斑点米カメムシ類の増殖に適した生息地が増えていますので、注意が必要です。
- 5) 近年、予察灯（桜井市）におけるイネカメムシの誘殺数が増加傾向にあり、昨年度は本田での発生も確認されています。イネカメムシは斑点米を発生させる他、出穂期の加害による籾の不稔を引き起こすため、出穂期の薬剤防除が重要です。

II. 果樹・チャ

1. カキ

(1) 炭疽病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、新梢での発病枝率は0.6%で平年並みでした。

防除上の注意事項

- 1) ふところ枝や軟弱徒長した枝は、病気の発生源となりやすいので、早めに除去します。
- 2) 罹病新梢や発病果を発見した場合は、周囲への伝染源となりますので必ず除去し園外へ持ち出して処分します。徒長枝を中心に感染が広がっている園が見うけられますので、いま一度、園内を見回ってください。
- 3) 梅雨期は炭疽病の感染盛期ですので、前年および本年発生園では、基幹防除に加えて7月上旬中旬（6月後半の防除から10日～2週間後）に殺菌剤散布を必ず実施します。

(2) うどんこ病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発病葉率は2.8%で平年並みでした。

防除上の注意事項

- 1) 葉の病斑（黒い小斑点の集まり）が目立つ多発園では、7月上旬中旬に炭疽病や落葉病の防除を兼ねて薬剤散布を行い、病勢の拡大を防ぎます。

(3) 円星落葉病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 前年10月下旬の巡回調査では発病葉率が4.0%で平年並みであり、越冬菌密度も平年並みと考えられます。

防除上の注意事項

- 1) 6月～7月前半が主要感染時期であり、定期的な予防散布を行います。
- 2) 昨年多発した園では、7月上中旬（6月後半の防除から10日～2週間後）に追加防除を実施します。

（４）チャノキイロアザミウマ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： やや少ない**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、被害果率は0.8%で平年に比べてやや少なかったです。
- 2) 有効積算温度による予測では、第3世代と第4世代成虫の発生ピークは奈良市でそれぞれ7月3日と7月22日、五條市でそれぞれ7月10日と7月29日です。過去5年の平均では、奈良市でそれぞれ7月4日と7月22日、五條市で7月11日と7月30日です。ので、発生時期は平年並みと考えられます。

防除上の注意事項

- 1) 地域ごとの第3世代と第4世代成虫の発生ピークに合わせて薬剤散布をします。また、可能な限り産地ごとにまとまって同時に防除をします。
- 2) 昨年度の多発園や被害が目立つ園では、薬液がかかりやすいように夏せん定を実施してから薬剤散布をしてください。
- 3) 除草作業を行った場合は、5日以内に薬剤散布をしてください。

（５）フジコナカイガラムシ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 少ない**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、寄生果率は0.1%と平年より少なかったです。

防除上の注意事項

- 1) 6月下旬が基幹防除の時期ですので、未防除の場合は速やかに防除します。また、散布むらのないようについていねいに薬液を散布します。
- 2) 発生の目立つ園では、6月下旬の基幹防除から7～10日後頃に追加防除を実施し、第1世代幼虫のうちに密度をしっかりと低下させることが重要です。
- 3) 枝が混み合っている所や高枝等、薬液のかかりにくい部分は防除前にあらかじめ整理します。

2. ナ シ

（１）黒斑病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 少ない**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発病葉は見られませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨が明ける7月中下旬頃までが感染の最盛期です。新梢葉の発病に注意して7月中下旬まで降雨量に応じて防除を行います。
- 2) 薬剤散布は、棚上の徒長枝先端部にもしっかりと薬液がかかるように散布します。

（２）黒星病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 少ない**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、発病葉は見られませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨期の降雨により発病が増加します。病斑の認められる発病葉や発病果は、周囲の葉・果実への伝染源となりますので、できる限り取り除き、園外へ持ち出し処分します。そのうえで、棚上の発育枝葉、園の外周部、枝の混み合った部分などにも薬液がかかるように、ていねいに薬剤散布します。
- 2) 多発園では、梅雨期間中は約7日間隔で防除を実施します。同一系統薬剤の連用を控えます。

（３）ハダニ類

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 少ない**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、寄生葉は見られませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 例年梅雨明け後に急激な密度上昇がみられますので、現在発生が少ない場合でも注意が必要です。こまめに園を観察し、初期防除を徹底します。
- 2) すでに発生が目立つ場合は、梅雨の晴れ間に防除を行い、梅雨明けまでにハダニの密度を減らしておくことが重要です。
- 3) 薬剤散布はていねいに行い、散布むらのないようにします。
- 4) 不要な徒長枝を置かない、重なり枝を作らない等、栽培管理面でも薬液がかかりやすいような工夫を心がけます。

3. 果樹共通

(1) カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報内容 **発生時期：遅い** **発生量：少ない**

予報の根拠

予報の根拠

- 1) 6月下旬の巡回調査では、カキの被害果は見られませんでした。
- 2) 6月の果樹・薬草研究センター内の水銀予察灯へのチャバネアオカメムシおよびツヤアオカメムシの誘殺数は、最大でそれぞれ8頭/日と5頭/日であり、少ない状態が続いています。
- 3) 6月下旬の巡回調査では、果樹カメムシ類のエサとなるスギ・ヒノキの毬果は平年に比べてやや多かったですが、毬果に果樹カメムシ類が寄生している地点は見られませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 今後の発生予察情報に注意し、園地をこまめに見回り、被害やカメムシ成虫を確認した場合は直ちに薬剤を散布してください。カメムシは気温が高くなると行動が活発になり、蒸し暑いと感じる日は特に注意が必要です。近年増加傾向にあるツヤアオカメムシが飛来する可能性がありますので、念のためご注意ください。なお、果樹・薬草研究センターのホームページで誘殺数を公開しておりますので参考にしてください。

4. チャ

(1) 炭そ病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の調査での発生ほ場率は12.5%でした。
- 2) 発病葉数は0.02葉/m²でした。

防除上の注意事項

- 1) 二番茶開葉期が防除適期になります。防除適期を逃さずに薬剤散布を行います。

(2) チャノコカクモンハマキ・チャハマキ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）内のフェロモントラップへの誘殺数は平年並となっています。

防除上の注意事項

- 1) 発蛾最盛期の7～10日後が防除適期です。（6月下旬から7月上旬が発蛾最盛期と予想されます。）

(3) チャノホソガ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）内のフェロモントラップへの誘殺数は6月第3半旬が最も多くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 新芽生育期に産卵が確認された場合は、必ず防除します。

2) 摘採間近に巻葉が見られた場合は、早めに摘採します。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の調査での発生圃場率は75%でした。
- 2) たたき落とし法による落下虫数は4.4匹でした。

防除上の注意事項

- 1) 新芽生育期の発生状況を把握し、萌芽期から開葉期までの適期に薬剤散布を行います。
- 2) ヨコバイは新芽に産卵します。摘採後に裾刈りを行うことで産卵場所を減らすことが出来ます。

(5) チャノキイロアザミウマ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の調査での発生圃場率は87.5%でした。
- 2) たたき落とし法による落下虫数は13.9匹でした。

防除上の注意事項

- 1) 新芽生育期の発生状況を把握し、萌芽期から開葉期までの適期に薬剤散布を行います。

(6) カンザワハダニ

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 6月下旬の調査での発生圃場率は87.5%でした。
- 2) 寄生葉率は1.52%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発生が認められる場合は、早期に薬剤散布を行います。
- 2) 多くの茶園で6月と8月の2回発生ピークが現れます。7月は発生ピークの谷間にあたりますが、7月下旬から発生が増加する傾向にあるので密度低減に努めます。
- 3) 薬剤の感受性が低下するので、年間を通じて同一系統薬剤の連用は避けます。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ（育苗）

(1) うどんこ病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の育苗床の巡回調査では、発生ほ場率9%、発病葉率0.3%でした。
- 2) 7月上旬に曇天が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 雨よけ栽培や寒冷紗被覆下で過繁茂になると発病が拡大しやすいので、注意が必要です。
- 2) 葉かきやランナー整理を行い、薬剤をかかりやすくしてから防除します。一定のランナーが確保できれば、混み合わないよう親株を早めに除去します。
- 3) 薬剤防除は、発生初期にサンヨール、スクレアフロアブル等を用いて防除します。薬剤耐性菌の出現を避けるため同一系統薬剤の連用を避けます。

(2) 炭疽病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 昨年に本病の発生が多かった育苗圃では、ほ場や周辺雑草等の保菌率が高い可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 発生前からアントラコール顆粒水和剤、ジマンダイセン水和剤、ベルコート水和剤による定期的な予防に努めます。
- 2) 親株およびランナーや周囲の子苗での発病を早期に発見し、発生部とその周囲をシー

- トや古ビニールで被覆後、直ちにゲッター水和剤を散布します。
- 3) 夜温が 25℃以上となる 7～8 月の高温・多湿時に多発しやすいので、古都華、アスカ
ルビー等の罹病性の品種では、苗床が混み合って蒸れないように、必ず苗床の株の整
理を行います。
 - 4) 多かん水や排水不良による過湿は、本病の発生に好適な条件となりますので注意しま
す。底面かん水法による雨除け育苗は、本病の防除に非常に有効です。

(3) 萎黄病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 6 月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 今後、気温の上昇によって発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は、周囲の培土およびランナーも含めて早期に持ち出し、肥料袋等に入れ密閉
処分します。
- 2) 苗床での根傷みは発病を助長します。特にオガクズベンチ育苗ではかん水不足による
根のやけに注意します。底部に水が溜まらないよう不織布で排水します。
- 3) 本ぼの太陽熱による土壌消毒は、遅くとも 7 月中旬までに処理を開始し、8 月中旬ま
で 1 カ月以上処理します。処理前には十分注水しておき、処理途中での追加注水は地
温を下げるので避けます。処理中には、被覆ビニールの破れ等がないか必ず点検しま
す。
- 4) 本ぼの土壌消毒後は、汚染土壌の付着や移動により病原菌を持ち込まないよう、農作
業や浸冠水に注意します。

2. ナ ス

(1) 褐色腐敗病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 6 月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 降雨が続くと、発病が助長されます。ホライズンドライフロアブル、ランマンフロア
ブル等による予防散布を励行します。
- 2) 被害枝葉及び果実は伝染源となるので、必ず早期にほ場外へ持ち出し処分します。
- 3) 病原菌は水によって伝染するため、ほ場及び畝上の排水を良くし、敷きワラやマルチ
によって降雨による「はね上がり」伝染を回避します。

(2) うどんこ病

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： 平年並**

予報の根拠

- 1) 6 月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 病気まん延後の薬剤防除では効果が劣りますので、予防および発生初期の薬剤防除を
徹底します。

(3) カスミカメ類

予報内容 **発生時期： 平年並** **発生量： やや多い**

予報の根拠

- 1) 6 月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率 50%でした。

防除上の注意事項

- 1) 食害による新葉の奇形、萎縮が見られたら薬剤防除します。
- 2) 被害が発生しているほ場では、スタークルまたはアルバリン顆粒水溶剤で防除します。
ただし、土着天敵の減少によりミナミキイロアザミウマが増加しますので、「6. 野
菜類・花き類共通 (2) ミナミキイロアザミウマ」の項を参考にして、別途対策を行
います。

(4) ニジュウヤホシテントウ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率 17%、発生株率 0.2%でした。

防除上の注意事項

- 1) 横縞模様の特徴的な食害痕を発見したら薬剤防除します。
- 2) ミナミキイロアザミウマ対策のため土着天敵保護に取り組んでいるほ場では、アクセルフロアブルで防除します。
- 3) カスミカメ類の薬剤防除を行ったほ場では、防除は不要です。

(5) チャノホコリダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では発生を認めていません。
- 2) 梅雨明け後に増加しますので、今後の発生に注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 生長点付近をよく観察します。発生初期には新芽の伸張が悪く、新葉の葉裏にやや褐色がかった光沢が観察されます。果実被害が発生してからでは防除効果が劣りますので、発生初期の防除を心がけます。
- 2) 登録のある殺ダニ剤はいずれも殺虫効果が高いですが、土着天敵保護に取り組んでいる場合は、スターマイトフロアブルまたはアプロードエースフロアブルで防除します。

3. ホウレンソウ

(1) 萎凋病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 今後、気温の上昇により発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 発生ほ場で連作する場合は、薬剤または太陽熱による土壌消毒を実施します。
- 2) 薬剤による土壌消毒では、処理前の土壌水分の調整が重要です。土をしっかりと握って、土塊に少しひびが入る程度が適当です。土が乾燥していたり、過湿の場合、薬剤の処理効果が著しく低下するので、注意します。土壌の耕耘は処理の直前にていねいに行い、薬剤処理後は直ちにガスが漏れないように新しいフィルムで土壌表面をきっちりと被覆します。
- 3) 消毒後は、汚染土壌の持ち込みや浸冠水による病原菌の侵入を防ぐため、農機具や長靴についた泥や雨水等の流入に十分注意します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率 67%、被害株率 17.3%でした。
- 2) 今後の気温上昇に伴って増加が見込まれます。

防除上の注意事項

- 1) ネギアザミウマの加害による新葉の奇形・萎縮を注意して観察し、発生を認め次第、防除を行います。
- 2) ネギアザミウマは広食性で多種の植物に寄生するため、ほ場周辺の雑草や、アスパラガス、ネギ、タマネギ、ナスなどの他の野菜類などが発生源となります。
- 3) 発生源となる雑草の除草を徹底します。ただ、除草後にはアザミウマがほ場内に移動するため、発生に注意します。
- 4) ほ場周辺で自家用の作物を栽培している場合は、ネギアザミウマの発生源とならないように適宜防除を行います。

4. ネギ

(1) ネギハモグリバエ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生圃場率 60%、寄生株率 10.4%でした。

防除上の注意事項

- 1) ベリマーク SC の生育期株元灌注処理の効果が比較的高いため、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、育苗期後半～定植当日に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) ベリマーク SC の生育期株元灌注処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になるため、できるだけ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存するため、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率 100%、被害株率 49.6%でした。

防除上の注意事項

- 1) ベリマーク SC の生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合も同様に、育苗期後半～定植当日に育苗トレイにも灌注処理を行います。
- 2) ベリマーク SC の株元灌注処理後もよく観察し、再発生が見られた場合はスピノエース顆粒水和剤、アドマイヤーフロアブル、ファインセーブフロアブル、プレオフロアブルなどを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) 一部の地域で殺虫剤感受性の低下した個体群が認められます。防除効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病虫害防除所にご相談ください。

5. キ ク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
- 2) 今後も天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 梅雨明けまでは定期的な予防散布に努めます。
- 2) 発生ほ場では、発病した下葉を早目に取り除いて処分してから、防除を行います。今後降雨が続く場合には上位葉～中位葉を中心に薬剤をていねいに散布します。
- 3) 発病前からダコニール 1000 や Q o I 剤、DMI 剤、SDHI 剤等を用いて防除します。但し、耐性菌の出現を避けるため同一系統薬剤の連用は避けます。

(2) 褐斑病・黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
- 2) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 3) 発生初期にはダコニール 1000 等で防除します。

6. 野菜類・花き類共通

(1) アブラムシ類

予報内容 **発生時期**： 平年並 **発生量**： 多い（ホウレンソウ）
平年並（イチゴ育苗、ナス、トマト、キク）

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率はイチゴ（育苗）9%、ホウレンソウ 33%でした。ナス、トマト、キクでは発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤感受性が低下しやすいので、同一系統の薬剤を連用しないように注意します。
- 2) ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性が低下したワタアブラムシの発生を確認しています。同じ系統の薬剤の連用を避けます。防除効果に疑問を感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

(2) ミナミキイロアザミウマ（ナス等の果菜類）

予報内容 **発生時期**： 平年並 **発生量**： 平年並

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、ナスでの発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 施設ナス収穫終了後は、好天日に2～3日間ハウスを密閉して60℃以上の高温で虫を殺してから、片付け作業を行います。
- 2) 土着天敵保護に取り組んでいる夏秋ナスのほ場では、6月上旬から土着天敵が増加しています。引き続き、ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、カーバメート剤、マクロライド剤等、天敵に悪影響のある薬剤の使用を控えます。
- 3) カメムシ類防除のためにネオニコチノイド剤を使用すると、土着天敵が減少して被害が急増する可能性があります。そのため、当面の対策としてファインセーブフロアブルを散布します。ネオニコチノイド剤とファインセーブフロアブルの散布が7月上旬までであれば2週間程度で土着天敵が戻って来ます。

(3) アザミウマ類（夏秋トマト・キク）

予報内容 **発生時期**： 平年並 **発生量**： 平年並（キク）
やや少ない（夏秋トマト）

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回では、発生ほ場率はキク 40%でした。夏秋トマトでは、発生を認めていません。

防除上の注意事項

- 1) 花き類では収穫適期を過ぎた放置株がアザミウマ類の温床となりますので、直ちに処分します。
- 2) キクでは、クロゲハナアザミウマの発生を確認しています。梅雨明け以降の増加が予想されるため、発生に注意します。詳細は、令和7年6月2日付で発表している令和7年度病害虫発生予察注意報第2号をご覧ください。
- 3) ミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマはほ場周辺のクローバー、ヒメジョオン等の雑草の花に多く集まります。雑草の開花前に除草を徹底します。開花後に除草すると餌を求めてアザミウマがほ場内に移動しますので、注意します。
- 4) アザミウマの種類によって薬剤の効果が異なります。薬剤の効果が低い場合は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。
- 5) トマト黄化えそウイルス（TSWV）等を伝搬するので、発病株は早急に処分します。

(4) ハダニ類（イチゴ育苗・ナス・キク）

予報内容 **発生時期**： 平年並 **発生量**： 平年並（イチゴ育苗、ナス）
やや少ない（キク）

予報の根拠

- 1) 6月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率はイチゴ育苗 55%、ナス 33%、キク 20%でした。

防除上の注意事項

- 1) 周辺で除草が行われていたり、植物残さが積み上げられた場合はハダニの侵入が予想されるので、注意して葉裏を観察します。
- 2) 雨除けや施設栽培ではハダニが増加しやすいので特に注意します。

